

蠅螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第四回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

1年なんて、あつという間だとも言える。64歳になる今年、年々、一年があつと言う間だ感は強くなる。しかし、1年365日は決してあつという間ではない。日々、充実させる努力をしていけば、ずいぶんいろいろなことが出来ると思う。この日誌レビューは当初、大きな出来事、事業をピックアップして二十年前の一年を概括しようと思っていた。

たまたま一月は「児童福祉施設職員向けの中堅職員研修」プログラム、二月は児童相談所再編整備に関わる「業務検討会議」、三月は「療育事業・不登校児のための琵琶湖一周サイクリング」があった。しかし四月になって、新年度早々そんなに大きなイベントはない。そこで、この辺りはさつと進める予定だった。ところが最近、あることに強く印象づけられる出来事に遭遇した。

研修の場だったのだが、そこの参加者が一様に、「三日間、楽しかった。仕事の話をしているのに…」と語った。また、私と早樫さんがプログラムのことを、ああだこうだと夢中で話しているのを脇で見て、「とても楽しそうに話している!」と、そのことに反応した。私の頭の中に「?」マークが生まれた。仕事の話をああだこうだと、いい大人が懸命に話しているのだから楽しいに決まっている。そんなことは自明のことだと思って今日まで来た。

ところが、それは必ずしもそう言えることではないらしい。仕事は苦しかったり、辛かったり、ストレスだったりするという。私とて、全くストレスがないなどとは言わないが、一日も早くこんなところから逃れて、悠々自適で暮らしたいなんて思ったことはない。面白いのだから止める理由がない。むしろ、「不本意でも、そこに引っ張ってゆかねばならない。立場というものがあるから…」なんて業務をしていたらきっとそうだろう。しかしそんな仕事っぷりをしたことがない。これは恵まれているだけでも、運が良いだけの事ではないと思ってきた。

では何なのか。その答えが一九九〇年一年の仕事ぶりにも含まれている気がした。読み返しながら改めて、ずいぶんいろんな事をしているなあと思う。しかし多分どれ一つとっても、しなければならぬことではない。面白そうで、したいからしている。しかも自分一人ではなく同僚や部下と一緒にである。

彼らにすれば、強引な課長に付き合わされていただけかもしれないが、意外にあの児相時代のことを良い記憶として、現在を生きている退職組、定年間近組が多いらしい。新たな場で活躍する後輩もどんどん増えている。

これは社会システムの最小単位、職場システムへの良い介入になっていたところが、期待以上に大きかったのかもしれないと思った。当時からの点はある程度自覚していて、効果も手にしていたので、「蠅螂の斧」だとは思っていなかったの、この角度からの記述は想定外だった。しかし、職場システム論としてこれも書いておく価値があると思い始めたので、四月からの日々を大事だけではなく、小事も振り返ることにした。

1990

四月

4/1

図書館にいて、池澤夏樹の本を探す。書店でよく見かける「スティル・ライフ」の他に、「夏の朝の成層圏」を見つけた。その奥付の筆者の略歴に福永武彦の遺児とあるのを見て驚く。福永の著書は二十代の後半に、数冊読んだ記憶がある。中でも「草の花」が真っ先に浮かぶ。話はうる覚えだが、ひどく印象的だったことを覚えている。

私にとって読書習慣は20代半ばからの事である。結核で半年の自宅療養を強いられるまで、本など読んだことがなかった。だからどの作家の何を読めばいいのか（そもそも、どれを読めばいいかなんて、読書習慣のない人間の教養主義的発想だ。今は、読みたいものを読めばいいのだと思っている。）

その初期に出会った作家の一人が福永武彦。その息子なんだ…と思った。そして池澤夏樹は作家としてだけでなく、映画字幕に名前を発見して驚いた記憶のある人でもある。テオ・アングロプロス監督のギリシア映画。エキブ・ド・シネマの作品の一つとして（岩波ホールなどで上映される作家群）「旅芸人の記録」、「こうのとりのたちづさんで」等を観たとき、その字幕監修に池澤夏樹の名を見つけた。氏はギリシアに住んでいたこともある理科系の文学者だ。近作では世界の博物館を巡って書いた「パレオマニ」がお気に入りである。

4/2

遊びの場所を少し広げようと、塾に通うことにした。京都インターナショナル・アカデミーというところで、今月から毎週金曜の夜「編集者講座」(全41回)を受ける。そこそこ高額の受講料だが、たいした目的はない。

この当時、よく考えていたことの一つに、すぐに役立つことばかりしてはいけないという自分への戒めがあった。

大学生が資格が欲しくて専門学校にダブルスクール入学したりするのを、鼻のきく行動だと思っている浅薄さが好きではない。

そういうと、「先生は実力があるから…」などと、分かったようなことを返してくる者もあるが、そんな思い込みにもうんざりである。世界を安易に了解して、その対策に時間を浪費するものではない。なにかにつけて、ハウツーはおおむねこの作業で、報われることは少ないものだ。

4/3

'90 京都児相レポートの原稿締め切りをむかえている。だいたい出揃ったものを読むと、読み物風で面白い。50ページぐらいに薄く仕上げ、読みやすくしたい。発行は5月20日の予定。

舞鶴児相以来ずっと、自分の所属する児相では業務レポートを年に一冊発行してきた。職員全員に執筆してもらう。

1980年代、やる気のある心理職はおおむね研究的で、学会発表したり、論文を書いたりしていた。しかし他職種は一般行政職員で、そんなことは関係ないといった感じだった。この心理職公務員だけ特別という風潮が気に入らなかった。

みんな臨床業務に就いているのだから、業務のまとめや振り返りをしておくのは大切だ。そこで、年一冊のレポートを出し続けることを職場に提案し、ケース担当した者全員には半ば強要していた。

直接関係はないが、私の中の整理では、この毎年の営みは20年後、このメンバーが筆者となった書籍が何冊も書店に並ぶことに繋がったと思っている。川崎二三彦、川畑隆、早樫一男、柴田長生、それぞれが筆頭著者名の本が存在する。

みんな、公務員試験を受けて採用された京都府職員で、長期勤続の者ばかりだ。けっして数年の腰掛け公務員期間を過ごして、

大学や研究機関に行った者達ではない。

こんな現象は世間にそうそう起きていることではない。起こったこと的背景にある必然サイクルを見定めて、上手くいっていることは繰り返す、真似る。上手くいかないことは中止する。これはシステム論的発想の原点だと思うが、なかなかこれが出来ない。人とはとにかく、だめなことだけ繰り返してしまう生き物である。



4/4

京都の出版社ミネルヴァ書房の編集者が会いに来て、家族療法で何か本を書かないかという。面白そうなものが作れるかどうか、何人か一緒に考えてみるつもりだ。”むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく。ふかいことをゆかいに”井上ひさしのこの言葉がまた頭をかすめた。そんなものなら作ってみたい。

20年後の2010年春、井上ひさしさんは亡くなった。この言葉が引用であちこちの記事で目に付いた。そして今、私はこの対人援助学マガジンを編集している。

私は現在まで、単著・共著合わせると十

数冊の本を出している。その最初の巡り合わせが、20年前に起きていたことを、この記述で思い出した。

さて更に20年後、現在のどんな巡り合わせが思い出されることになるだろう。世の中に向けて今私のしている事が、未来の日にとっての、企画編集になっていると良いなどと思う。

4/6

登校拒否をしている小5の男の子の新学期直前の面接。別室で見ていたのだが、途中から面接室に入って、「学校の椅子」という課題をやることになった。3時間近い面接で、両親は自分達自身の手で掴んだものを子供に伝えた。後は新学期初日の朝だ。

学校の椅子は実際に面接室内で、学校に見立てた椅子を一脚、ちょっと離れた場所に置いて、両親にそこまで子どもを連れて行ってもらおうエクササイズだ。室内の数メートルしか離れていない場所に、息子を連れて行くのは、バカらしいほど簡単な話に思える。

ところが実際は、この数メートルを移動させるために両親は一時間以上も苦勞することになった。

ここで発見できたことは、学校における出来事と不登校の息子との関係とは別のことだ。

両親や本人が訴えるように、学校で何かがあるのかもしれない。しかし今、この面接ではっきりしたのは、この両親は小学生の息子を数メートルも動かすことが出来ない。そして、「息子さんのために、ご両親としてこんな事すら出来ないのは問題だとは思いませんか？」という問いに、「こんな事をして息子が、余計に悪くなったら…」などと

案ずる。

室内を数メートル、無理に移動させることで悪化する息子の症状って何だ！と私は思っている。この時から現在に至るまで、同じような事を言っているクライアントやセラピストにたくさん会った。あの人達は本気でこんなことを信じているのだろうか？

結果に責任の持てていない共犯事象を、専門家と保護者が「不問に伏しあう」ことによって、世の中にたくさんの「ひきこもり」青年達という結果になったと私は考えている。人には今できることがたくさんある。

4/7

第16回全国児童相談所問題研究セミナーの第一回拡大現地実行委員会。京都府のほか、神戸市、大阪府、京都市と、花園大学のN田さんの12名。予定通り私が実行委員長を引受けた。思い切った企画を考えようということになり、いろいろアイデアが出た。

土曜日の午後、今は児童問題研究セミナーと改称して継続されている研究会の現地実行委員会を開催した。こういった業務関係の自主的企画を次々に引き受けて実行していた。けっして暇だったからというわけではないが結果として、こんな活動で職場の団結や、業務能力の向上を計っていることになった。そして、職員、スタッフの地力は蓄積されていった。

このとき、外部から来ていた野田正人さんは今、立命館の大学院で同僚だ。

4/9

今春のサイクリングに参加した子供達7人中6人が新学期から学校に行き始めているという電話が入る。驚きと共に嬉しい。でも無理することはないぞ。

第3号に続いて、「不登校児の琵琶湖一週サイクリング⑩」が別冊付録でアップされています。ご覧ください。

なお、申し上げる必要もないことですが、この物語は、複数回の事業を編集して、一回のサイクリングに構成した漫画家・団士郎作のフィクションです。ですから、この4月9日の報告（春のサイクリング）の中に、含まれている子も、含まれていない子もいます。ご承知おきください。

4/10

K本弁護士を招いて児相職員研修会。法律の組立と人間ドラマの情緒性の間に、どんな橋が架かるのか。架けられるのか。なかなか面白い一日だった。また続きをやれるといい。

近年、児相では児童虐待問題を通じて、弁護士と協働する機会もずいぶん多くなっているようだ。しかしこの時点で、弁護士は縁遠い専門職だった。たまたま、児童問題に関心のある弁護士を招いて、法律家の立場から見た児童福祉を聞かせてもらっていた。

この繋がりから、新しく始めた弁護士事務所での児童福祉司研修。三児相のCW二名ずつが、月例で事務所に伺って、ケース検討を行っていた。数年間継続されたこの取り組みも、当時、他ではなかなか見ないものだった。

我々はここで、親権、相続などの問題だけでなく、国籍や戸籍問題など、いろいろな事象のことを考えることになった。そして個人的には、私はやっぱり法律的な考え方とは根本発想が合わない体質だと思った。つまり漫画家体質は良くも悪くも、もっと杜撰で自由だった。

4/12

今月から月二回、受理判定措置会議に京大病院の小児精神科医I坂先生をスーパーヴァイザーで迎えることになった。

診察は別で、週一回お願いするT辺先生も新任。顔ぶれが一新した。

考え方はいろいろだが、これも児童相談所における外部専門家の活用方法についての一プランと言えるかもしれない。

当時、嘱託精神科医は府立大学の医局から、教授の推薦による人が配置されてきていた。当然、児童精神科医であることは少なく、中には、子どもはほとんど診たことがありませんと告白する医師もいた。

しかしそれをどうこう出来る余地はなく、小さな出先公所の所長は、きちんと医師を確保するだけでも、それなりの努力が必要だったようだ。そこでそのルートとは別に、児童精神科医の業務協力の依頼できる道を探っていた。

ある課員の尽力で、児童精神科医として信頼を得ていたI坂医師からやっても良いと返事をもらった。しかしこれまでから派遣されてきている大学系列とは別のルートだったため、そちらと交代するようなことは組織的には叶わなかった。

二人の精神科医を、それほど受診児童が多いわけでもなかった児相で、どう対処するかという事になってしまった。

結果的に、嘱託精神科医ではなく、受理判定処遇会議のsvとして、会議に参加してもらうことにした。この後、京都児相の会議には隔週、児童精神科医が同席し、更にある時期には、児童精神医学を研修中の後輩女医も同席する事になった。(この女医は後年、K市児童福祉センターの医師として働くことになった。また、I坂医師とは、この10数年後に、立命館大学の教員同士として再会することになった。もっとも、氏は二年あまりで又現場の医師として転身していったが)

会議出席メンバーの経験や専門性だけで

はなく、部外専門家の同席は、会議を緊張感のあるものにし、結果的に重層的な議論を促す効果があった。

4/18

家族療法ビデオカンファレンスの日。特別プログラムとしてアメリカ人の家族療法のVTRを観て話し合った。

家族療法家横田さんに、月一回来てもらって、所内で実施された家族面接のVTRを見ながらのケース検討をしていた。その特別プログラムとして、どこかで手に入れた家族療法のVTRを見ながら話し合った。

家族療法に関しては、マジックミラーの裏の部屋で、実施中の面接を見られるようにしてあった。今風にいうなら、情報の共有化、面接の可視化だ。関心があれば職員は、現在進行中の面接展開をライブで知ることが出来た。

この時の所長は一般行政職畑でずっとやってきた人だったが、よくスタッフルームで面接を見ていた。

4/24

昨年の秋から積み残し課題になっている親睦会旅行の実現リミットが迫っている。この間の紆余曲折には、親睦会役員としてはいろいろ言いたいことがあるのだが、とにかく実現する責任を果たそうと4人で頑張った。そして静岡県・大井川鉄道の終着・井川と寸又峡温泉に決まって、5月に二班に分れて行くことになった。

職場のメンバーで旅行なんて今時、流行らない。その通りだと思う。当時だってもう十分、時代遅れだった。しかし、それにも関わらず私の職場では、親睦旅行は重要な行事だった。

この背景には、旧来型の宴会延長の親睦旅行があり、それに女性職員はほとんど仕

事の延長感覚で同行させられていた。直前に、家庭の急な事情でキャンセルする人が必ずあったのは、これを示している。

しかし私は、前の職場（舞鶴児童相談所）で、女性職員が「家事を離れて、業務も離れて、楽しめる旅行なら行きたい」。「子育てをしていると、なかなか勝手に旅行なんて出来ないしねー」、「一家で出かけようものなら、お金がかかって仕方ない…」と語るのも聞かされていた。

そこで近場の温泉への、一泊の宴会旅行ではなく、希望も募りながら、二班に分けて、年次休暇も一日含めた二泊三日のちょっとしたツアーを提案した。

舞鶴児相時代、「石垣島&西表島ツアー」、「函館&二股ラジウム温泉ツアー」、「東北のランプの秘湯と東北自動車道縦断ドライブ」など、女性職員がほぼ全員出席になる親睦会企画を実現していた。

京都児相に来て、職員の気質も違うし、時代も変わりつつあったので、同じ事は出来ないが、それでも楽しくなければ職場はストレスと、勤務評定の結果、病巣になると考えていたので、何か企画したいと思っていた。そして賛否ある中、やっとたどり着いたのがこのプランだった。

寸又峡温泉は年配の人なら名前に記憶があるかもしれない。ライフル魔といわれた金喜老が立てこもって、全国ニュースに国民が釘付けになった場所である。それまでは地元の人以外誰も知らなかったと思う。ここを選んだのは、それが面白かったからだ。

この後、京都児相の親睦旅行企画はニュース性がテーマになり、現場を見に行くツアーになっていった。雲仙普賢岳が大噴火

した時には、当時の村山首相より一日早く、火山灰と土石流で大変な、天草鉄道にも乗った。伊豆大島が噴火したときも、時間が経ってもまだ暖かい溶岩流の上に、東京都が復旧作業で付けた道路を走って、三原山見物に行った。

親睦会については次に異動したところで面白い経験をした。そこは所長と職員が全くそりの合わない組織だった。少人数なのにそれだから、日常がぎくしゃくしていた。

管理職も職員も大人げないと言えばそうなのだが、そのため、親睦会費というのを給料天引きで集めていたことが頭痛の種だった。昨今は、こんな金の扱いはしないが、当時はまだこういうところも多かった。

何が困ったかという、集めた会費は貯まっていくのに、みんな所長と親睦旅行なんか、行きたくないのだ。歓送迎会と忘年会は嫌々出席するのだが、他は御免ということになり、何十万円という積立金が貯まっていたのだ。前に働いていた人など、積み立てただけで使わずに異動になっているなんて馬鹿なことがあった。

そこで大奮発の贅沢宴会を、京都の奥座敷・美山荘で実施した。関東の趣味人あこがれの一軒宿だが、それでも宴席終了後、夜中にタクシーで帰宅した人があった。

ここで生まれて初めて、松茸でお腹がいっぱいになる経験をした。いったい、いくら払ったのだろうか？